別紙様式３

令和元年度　【　学園研究費助成金＜ B ＞　】研究成果報告書

学部名　文化情報学部

ﾌﾘｶﾞﾅ　アベ　ジュンイチロウ
氏　名　阿部　純一郎

研究期間　令和元年度

研究課題名　小笠原諸島民の〈故郷喪失／ディアスポラ〉経験に関するライフヒストリー研究

研究組織

	氏　　名	学　　部	職　　位
研究代表者	阿部　純一郎	文化情報学部	准教授
研究分担者			
研究分担者			

１．本研究開始の背景や目的等（200 字～300 字程度で記述）

本研究は、太平洋戦争末期に日本本土（内地）への疎開を余儀なくされた小笠原諸島民への聞き取り調査を実施し、戦争とそれに続く 20 年間の米軍占領期を通じて、故郷への帰属意識や島民同士のネットワークがいかに変質（分断／持続）したかを分析する。当時「強制疎開」の対象となった島民は全島あわせて 7 千名に及ぶが、戦後米軍は「欧米系」島民（小笠原に最初に定住した欧米系住民の子孫）にのみ帰島を許可し、「内地系」島民は 1968 年の本土復帰まで〈故郷喪失＝ディアスポラ〉状態に置かれた。また同じ「内地系」島民でも、返還後に島に戻った者、内地での生活を選んだ者、現在も帰島が許されていない硫黄島出身者など、境遇は様々である。本研究は、こうした立場の違いを考慮しつつ、小笠原諸島民が強いられた／ている〈故郷喪失＝ディアスポラ〉経験を、なるべく複数の立場から多面的に描くことを目指す。

２．研究の推進方策（300 字程度で記述）

本研究では以下の 2 つの作業を中心に進めた。

【1】体験者への聞き取り調査：強制疎開を体験し、戦後父島に帰島した 2 名の島民のライフヒストリーを聞き取り調査した（2019 年 10 月 2 日）。1 名は、父島に最初に定住した欧米人の末裔で、米軍の許可を得て 1946 年に帰郷した「欧米系」島民の女性（O 氏）、もう 1 名は八丈島から移住した「内地系」島民で、1968 年の本土復帰直後に東京都職員として帰島した女性（T 氏）である（彼女の夫も返還準備委員として島の復興事業に深く関わった人物である）。

【2】証言集の作成：両氏が体験した疎開先（内地）での生活や、米軍占領時代および本土復帰直後の父島の生活についてインタビュー内容を記録・編集し、証言集として冊子にした。

なお上記の作業には、代表者の研究室に所属する学生（3 年生 11 名）も参加し、調査結果は第 13 回社会調査インターカレッジ発表会（2019 年 10 月 26 日、金城学院大学）で報告した。

３．研究成果の概要（600 字～800 字程度で記述）

本研究を通して、米軍占領期および本土復帰直後の島の生活実態や、帰島に至った経緯などについて当事者の語りから具体的に知ることができた。特に注目すべきは以下の 3 点である。

【1】帰島の動機：O 氏は 1946 年に家族総出で帰島したが、その理由は、敗戦直後の内地では食料の調達に相当苦労し、帰島した方が生活の安定が得られると考えたからだった。実際に帰島すると、数ヵ月間は米軍から無料の配給が受けられたうえ、自宅の庭でも野菜を育て、食料事情は好転したという。一方、T 氏は 1968 年にいち早く帰島したが、その頃すでに親族は内地で生活を築いていたため、単身で帰島した。T 氏自身、最初から帰島したいという強い気持ちがあったわけではなく、夫が復興準備委員として先に島に入っていたこと、夫のそばで支えるよう周りの親族や八丈島の婦人会から説得されたことが帰島の決め手となった。いずれのケースも、「故郷への強い愛着」から帰島を決断したという安易な解釈に修正を迫るものである。

【2】占領期の米軍と欧米系島民との関係：O 氏によれば、米軍の占領政策には内地との通信を禁止するなどの厳しい面がある一方、親との面会や歯の治療のためなら内地渡航を許可するなど温情的な面もあった。また、O 氏は軍司令官とも良好な関係を築いており、アメリカの独立記念日には食事会に招かれたり、司令官の妻に頼めばアメリカの通販会社から洋服も取り寄せてもらえたという。この親密さは、O 氏の親族が司令官の宿舎で家事手伝いとして働いていたためでもあるが、本土の占領軍と一般住民の間にみられた強い序列関係とは対照的である。

【3】復帰後の欧米系島民と内地系島民の協働：T 氏は帰島後、島の復興に関わる 100 名ほどの人達に食事を提供する仕事を任せられたが、食材は十分には届かず、人手も足りなかったという。その状況をみるにみかねて助けてくれたのが O 氏であり、そこから約 10 年間におよぶ食堂での協働が始まった。当時、欧米系島民のなかには小笠原の本土復帰や内地系島民の帰島に反対する声も多くあったが、上記の事例は、復帰直後の過酷な生活環境のなかで、「欧米系／内地系」という民族間の垣根を越えて両者が協働するに至った、最初の原点を示している。

４．キーワード（本研究のキーワードを１項目以上８項目以内で記載）

①小笠原諸島	②故郷喪失／ディアスポラ	③強制疎開	④米軍
⑤占領	⑥本土復帰	⑦	⑧

５．研究成果及び今後の展望（公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他○名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。）

①椙山女学園大学文化情報学部阿部研究室編、2020 年 1 月、『2019 年度小笠原諸島調査報告書：父島・旧島民の「故郷喪失」体験』、椙山女学園大学文化情報学部阿部研究室.

②椙山女学園大学阿部研究室、2019 年 10 月 26 日、「小笠原諸島民の『故郷喪失』体験に関するライフヒストリー研究」、第 13 回社会調査インターカレッジ発表会（於：金城学院大学）.